

今期は途中から投稿数が急増したため、一日の投稿数に制限が設けられました。そのことは結果的に投稿者の方々にとって有意義であったと私は考えます。昨年の総評にも書きましたが、類似した作品を複数投稿して本来必要な自選を選者に委ねてしまう方がときどきいらっしやって、それではなかなか力がかからないのではないかと懸念していました。しかし、制限が設けられて以来、そのような投稿はほとんど見られなくなりました。つらくとも厳しく自選をおこなうことで批評眼が鍛えられ、実力に反映されてくるはずです。その手ごたえを今年後半に実感しました。

さて、今年の新人賞は郡司和斗さんに決まりました。郡司さんの作品を読むと、たちまちこちらの言葉が消えてしまう感覚におそわれます。たとえば「水の店には水の客／買い物は／死んでからが本番だから」に対して、私は何を言えばいいのでしょうか。ひとまずは言葉の情景を前に陶然とするしかありません。考えるのはその後のことです。しかし、そういうものこそが詩ではないか、という思いに貫かれます。

そもそも、詩は「言いたいこと」とは質の異なる言語だと思えます。たとえば、言いたいことなど何もない、と心のなかでつぶやいてみたとしましょ。意外とそれはやせ我慢でも何でもなくて、思うことのすべてが言いたいこととは限らない、と気づきます。そのあとで少しずつ心の上澄みに言葉のようなものが泡だってきます。その泡こそが詩の原液のようなものなのだ、と、なんとなく、しかし確信的に、私はいつも思います。

同じく郡司さんの「会いたいと同じくらい／会えなくていいと思う／林檎しゅかつと囓る」はどうでしょうか。「会いたいと同じくらい／会えなくていいと思う」、ここまでならほかにも書けるひとはいるかもしれません。しかしそのあとに「林檎しゅかつと囓る」を繋げるなんてことは、郡司さんでなければできないでしょう。ここでされていることは、二つの離れた事象を同一の地平に並べる、ということです。言葉になんらかの還元を施して並べているわけですが、このような意識も優れた詩をつくるためには欠かせないものだと思います。

奥村俊哉（長谷川柊香）さんの「人は／木から／ことばを奪い／紙に書き継ぐ」も強く印象に残っています。この発想はありそうでなかったですね。木から奪ったことばを紙に書くことで、私たちは言葉をもう一度、木に返しているのでしょうか。

橋田純寧（こはくいろ）さんも大変健闘されました。胸がしめつけられるほど甘く研ぎ澄まされた自意識と優れた身体感覚が印象的です。自意識の内側と外側の世界の摩擦が詩の言葉をつむいでいるようです。

梶伸太郎（立花ぼとん）さんも自意識が特徴の一つですが、梶さんの場合は薄い膜に覆われた自意識の内側の奥まったところまで身を潜り込ませ、そこから世界を覗き見ているようです。内側の空間のようなものも突き当てています。それから、吉沢美香さんの「夕立の一粒ごとにある鏡」も美しく、たいへん驚かされました。

ほかにも、豊富瑞歩さんの際立った清潔感とのびやかさ、江藤裕子（空いう子）さんのどこか大胆で力強い描写、永山逢海（永山愛望）さんのバランス感覚、山本巧さんの日常をユーモラスに切り取る視点、中矢温さんの深い陰影を随伴させた言葉のぬくみなど、大変素晴らしかったです。今回は惜しくも入賞に至りませんでした。秋山頼子（天山普美子）さん、頂風－chofu－（大野多絵）さん、吉富快斗さん、田崎森太さん、猫谷圭希（菊岡千紗）さんの作品も優れていると思います。それから、コンクールには応募されません

でしたが、松下誠一さんは確実に力をのばされている印象があります。これからも自由に書いてほしいと思います。

昨年の立花開さんの奨学生選考総評のなかに「長く続けることほど難しく、価値のあることはありません」という言葉がありました。それに私は深く共感いたします。たしかに評価はたいせつですが、それだけにこだわりすぎると、書き続けることが非常に苦しいものになってしまいます。それではもったいないですよ。だから自分を信じて、でもおごらず素直な心で、どんどん書き続けて、口語詩句へ投稿してください。応援しています。

それでは、ひとまずはお疲れさまでした。